

【読解例】

<p>□に入る文字を赤で示します。</p>	<p>病 中見舞状 びやうちう</p> <p>一筆致^{いたし}ニ啓上^{きしよ}一候、貴所様久々^{ひさびさ}</p> <p>御病氣^{びやうき}之由、如何御座^{いかが}候哉、乍^{さくらふや}</p> <p>承^{うけたまはり} 御見舞^{みまひ}茂^も不^ず申上^{しつげい}一、失敬</p> <p>之^{いたり}至^{ゆつじよ}御宥恕^{ゆるしみ}可^レ被^レ成下^な一候、且此品^{かこのしな}</p> <p>龜抹^{そまつ}之至^{いたり}ニ御座候得共、御見^み</p> <p>舞之^{まひ}驗^{しるしまでしん}迄進上^{せうかく}仕候、折角^{せうかく}</p> <p>御保護^{ごほご}可^レ被^レ遊様專^{やうせんいち}一奉^レ存候、</p> <p>恐々不具</p> <p>【注】久々…「長い間」の意、宥恕…「許す」と、龜抹…「粗末、験…「印、折角…「十分に気を付けて」の意</p>
<p>読み下し文(例)</p>	<p>病中見舞状 一筆啓上いたし候、貴所様久々御病氣の由、いかがが御座候や、承り乍ら御見舞も申し上げず、失敬の至り御宥成し下さるべく候、且つ此品龜抹の至りに御座候えども、御見舞の験まで進上仕り候、折角御保護遊ばさるべき様專一に存じ奉り候、恐々不具</p>
<p>現代語訳(例)</p>	<p>病中見舞状 一筆啓上いたします。あなた様は長い間ご病氣と伺っておりますが、いかががでしょうか、(ご病氣であることを)承りながら御見舞も申し上げず、失敬の至りをお許しください。またこの品は大変粗末なものですがお見舞いの印までに差し上げます。十分に気を付けてお体を保護なされることが第一かと存じます。 恐々不具(「内容が整っておらず恐れ多いことです」という意味で、手紙の最後に書く。一般に「書止め」)</p>

【解説】

今回は往来物を課題としました。この往来物には読み仮名や返り点が入っていますが、それらを見て、江戸時代の子供も文字の読み書きを覚えていったものと思われる。

4行目の「茂」はひらがなの「も」と同じです。5行目と8行目にある「可被～」は「～さるべく(べき)」と読み、相手への尊敬を表します。これも大変よく使われます。

くずし字の学習は文字の形を覚えて習得していく方法がまず挙げられますが、文字の形は多様で、覚えた文字の形どおりの文字が毎回に出てくるとは限りません。そこで、既存の翻刻文を多く読み下し、その時代独特の言い回し・表現に慣れるという方法もあります。くずし字の学習として、文書館の資料叢書や自治体史の資料編などに掲載されている翻刻文を読む方法はおすすめの学習方法です。